

自著と
その周辺

最新老年看護学（第3版）2018年版

日本看護協会出版会
2018年2月1日発行
定価3,800円+税

水谷信子（監修）

水野敏子 高山成子 三重野英子 會田信子（編集）

本書は、看護基礎教育（看護専門学校、短期大学、大学）における「老年看護学」のテキストです。超高齢社会の日本において、このような看護テキストがあることは自然なことで捉えている方は多いと思います。しかし日本の看護基礎教育の歴史を振り返ると、「老年看護学」が独立した教科目になったのは、平成元年（1989）の『保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則（いわゆる指定規則）』の改定にともなうカリキュラム改正以降となります。

ちなみに、戦後の看護学校の教育の標準化は、昭和26年（1951）の指定規則の制定に始まります。当時の教科目は、医学教育と類似した疾患・臓器別で「内科看護学」「外科看護学」などの名称でした。昭和43年（1968）の第2期指定規則の改正で、対象別看護の組み立てとなり（基礎看護学、成人看護学、母性看護学、小児看護学の4本柱）、さらに平成元年の第3期改正以降、「老年看護学」「精神看護学」「在宅看護学」などが加わり、医学教育とは対照的なカリキュラム体系となったわけです。

一方アメリカでは、雑誌AJN（American Journal of Nursing）に看護師による高齢者ケアに関する論文が1904年に掲載されています。1950年にはNewton Kによる最初の老年看護のテキストが刊行されますが、政府管掌の老人医療保険の創設を視野にいたしたアメリカ政府の動向とあいまって、1962年にはアメリカ看護師協会（American Nurses Association; ANA）が老年病看護業務協議会第1回大会を招集し、1966年に老年看護（Geriatric Nursing Division）が看護専門領域の一つとして承認されています。その意味で、日本の老年看護学の歴史は浅く、米国よりも30年近くの遅れをとってのスタートであったといえます。

今回、大改訂となる第3版をつくるにあたり、私たち編者はどのような看護テキストにするか何度も議論しました。そして、①国家試験出題基準の項目を網羅していることは勿論であるが、国試の出題基準に新たに採用されるような老年看護の実践に重要な最新知識や概念を積極的に盛り込むこと、②看護基礎教育で老年看護学を履修しなかった看護職にも活用してもらえようエビデンスの表記を重視したテキストにすること、③人生100年時代の多死社会における法的・倫理的・社会的課題を多面的に理解できるように資料を充実させること、さらに、④高齢社会のリーディング国となった日本の看護職として世界にも目を向けられるように、他のテキストでは扱っていない老年看護学の歴史的発展過程やデータを盛り込むことなどをあげました。

出版社に届く読書カードには、看護学生のみならず、現役ナースからも「老年看護学の学び直しに利用している」などのメッセージをいただいております。大変うれしい限りです。

なお本書は、下記の全9章から構成されています。

- 第1章 老年期を生きる人々の理解
- 第2章 世界における日本の老年看護
- 第3章 老年看護の倫理的課題と対応
- 第4章 心身の加齢変化と健康アセスメント
- 第5章 老年期に特有な健康障害と看護
- 第6章 高齢者とその家族への看護
- 第7章 認知症高齢者の看護
- 第8章 高齢者の人生の最終段階における看護
- 第9章 高齢者の暮らしを支えるヘルスケアシステム

これからも、時代の変化と患者・家族のニーズを見据えて、「老年看護」の本質や知識・技術・態度を涵養していけるようなテキストを作成していきたいと思っています。日本で歳を重ね、この国で死ねてよかったと思えるような時代が来ることを願って…。

（信州大学医学部保健学科老年看護学 會田信子）

